

万九千社 立虫神社 社報

神戸の郷

第七五号 令和三年初秋「発行」
令和三年九月吉日 代宮家（錦田）

今季の祭

立虫神社

秋祭

十月二日

（土）

十月三日

（日）

皆様お変わりございませんか。
国内外で災厄をもたらしている悪しき疫病の一刻も早い終息を切に祈るばかりです。

さて、天候不順な夏を過ぎ残暑が続きますが、季節はようやく実りの秋を迎えようとしています。

二日にわたって行われる当社の秋祭りは、稲をはじめとする農作物が

豊かに収穫できたこと、農業をはじめ、工業、商業など全ての産業が順調に運んでいること、日々平和に暮らしていただけることなどを氏神さまに感謝と祈願するお祭りです。

氏子地域に住む全ての人々が心を合わせて奉仕する、一年で最も重要なお祭りで、「大祭」と呼ばれています。

神様と神社にとりましては、縁あって神立・千家に暮らす全ての人が「氏子さん」です。どんなにも遠慮なくお参りのうえ神様に感謝と祈りを捧げましょう。



十月二日

土曜日

一、長寿感謝 健康祈願祭

午後一時より

長寿をお祝いし、神前に感謝の真心を捧げ、これからの更なる健康をお祈りする祈願祭です。

昨年まで九月上旬に行っていました。今年から暑さが落ちて着き気候が安定する秋の大祭りの前日に行うことにしました。

数え年七〇歳以上のどなたでも参列できますので、詳しくは別紙案内状をご覧ください、九月二〇日までに社務所へ直接お申し込み下さい。

なお、参列時には男女を問わず、服装は礼を失しない自由な服装（平服）で結構です。お気軽にお詣り下さい。

一、子禱神事 一、氏子入り奉告祭

午後二時より

令和二年八月一日から今年の七月三十一日頃までに誕生された神立千家の子供さんとその家族が参拝し、新たな氏子として健やかな成長をお祈りします。

また、昨年の秋祭り以後、新たな氏子として年間の神社維持負担金を奉納された皆様にも御昇殿いただき、御神縁に感謝して、末永い幸せをお祈りする奉告祭を執り行います。

※当該の方は、平服（背広ネクタイ等）で時刻までに御参集下さい。



一、前夜祭

・深津一統祭 午後六時より

・竹内一統祭 午後七時より

立虫神社へ合祀された千家の客神社にゆかり深い氏子の竹内一統、古くから万九千社にゆかりある神立の深津一統が昇殿参拝します。

大祭前夜にあたり、一族挙げて感謝と祈りのまごころを捧げます。

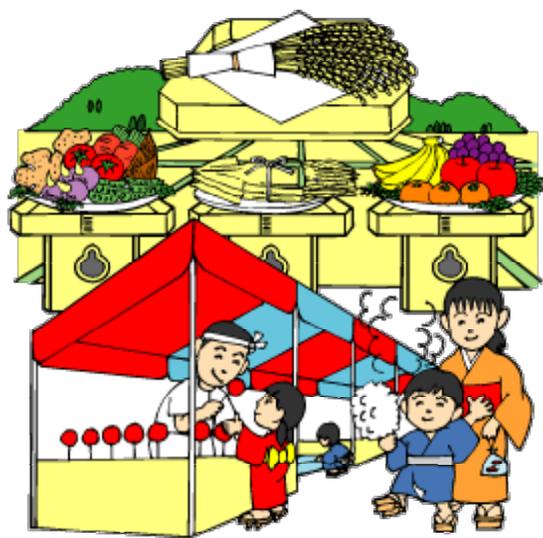
十月二日

日曜日

一、大祭 祭典

午前九時より

秋祭りでも最も重要な祭典です。宮司はじめ神主・氏子代表が昇殿し、厳かに御奉仕します。



御神前に海川山野のたくさんのお供え物をして、氏神さまをおもてなしし、宮司が祝詞を奏上し、皆が玉串を捧げて感謝の気持ちをお伝えして人々の幸を祈ります。

※氏子さんのうち、秋祭りのお供え、お米当番（米つなぎ当番）の方は、午前10時30分〜正午頃までに神社へお供えし御参拝下さい。

今年は、恒例の秋祭の御札、御洗米

のほか、紅白餅、特別授与品として御神酒、五色神事華を全戸頒布願います。頒布品の重量がかさみますこと御承知おきのうえよろしく願います。

一、御神幸

本殿祭の後、午前一〇時二〇分頃に神社から元宮へ向けて、御分霊を神主が捧持し、総代らの行列が出発。元宮での御旅所祭を経て、午後〇時半頃に神社へ帰着、還幸祭を行います。

※今年昨年に引き続き、誠に残念ながら、疫病感染予防のため例年の小学一年生がひくお神輿や神和会千神会の奉仕による御獅子、番内、茶立て姫などの賑々しい練り神事の行列、餅撒きは、**全て取り止めます。**

一、神楽奉納

午後一時半頃より夕刻まで

◆午後一時半頃〜 出雲神楽

万九千社立虫神社神代神楽社中七座より

「清米」(きよめ)

「四方剣」(劔舞)

などを予定しています

◆午後三時二〇分頃〜御神楽

『浦安の舞(うらやすのまい)』

神立千家氏子小学生女子有志



◆午後四時頃〜 保育園の神楽

『すさのおの命のやまたのおろち退治』

あい川保育園社中

◆午後五時頃〜 出雲神楽

万九千社立虫神社神代神楽社中

神能より

『八戸(やと)』

須佐之男命の

ヤマタノオロチ

退治の神話を舞い

奏でる予定です



お知らせ

今年の七五三詣

例年通り、十一月十五日(月)

午前十一時より御祈念します。

ほかの日時を希望なさる方は事前にお申し出下さい。詳しくは

別紙ご案内状をご覧のうえ社務

所までお申込み下さい。

《あきがき》

疫病の渦中とはいえ、あつという間に正月、

春、夏を過ぎ、秋を迎えました。▼令和元

年までの当たり前のお祭りの賑わいが無性

に懐しく感じます。▼一日も早い疫神退散

を祈るばかりです。皆様どうぞお健やかに

お過ごし下さい。(文責 宮司 錦田剛志)

文化

カミ・人・祭りの原風景 「神社のことは事典」

＜錦田剛志＞

③ 参道【さんどう】

鳥居をくぐり抜け参道へ進む。一般に参道とは、社寺参詣のためにつくられた道、松並木の砂州の道、参道」とされる。古代に神社の成立と共に存在したであろうが、その淵源は不詳である。

神社は、海川山野のうち、に人々が靈威を崇め祀った多様な聖地に鎮座する。そこへ向かう参道もまた鬱蒼とした樹林の中を登り行く長い石段や山道、まっすぐ

人間からすれば神社へ自らの歩みを導く「道しるべ」、心を神域へ誘い、高揚感と清浄感をもたらす「神々へ近づく道」。祭祀時にはさまざまな風流、行列、舞踊などが行われる「神事芸能の舞台」でもある。そこは露店が立ち並び若男女が集い、人、物、情報が行き交う「交易交流の広場」にもなる。

聖と俗を結ぶ神域



戦後のほ場整備や区画整理事業、松枯れ被害で今は失われた万九千神社旧参道と社叢の風景＝1952年、現出雲市斐川町併川

真ん中避け通行が礼儀

神々の視座に立てばどうと濃密な時間と空間を共有するのだ。このとき参道は「神々が往来する道」、聖と俗がふれあう「神人交感の広場」だ。奥山に山宮がある。麓に里宮がある神社は、年に一度か数十年に一度、外界へと出掛け、人々

社「神迎の道」もその例で、神在祭に来临する「神々の通路」である。そのため人間は参道の真ん中を避け、端っこを通行するのが礼儀にかなうと伝える神社は多い。参道は神と人の双方にとって、聖と俗を結ぶ必要不可欠な神域である。今日、近代合理主義や経済至上主義にさらされ、道路や鉄道、宅地開発などで寸断され失われた参道は多い。鎮守の森の参道が持つ歴史的自然的景観の重要価値を忘れてはいけない。

（万九千神社宮司）
Ⅱ 第1、第3木曜掲載Ⅱ

〔参考資料〕『山陰中央新報』転載

月二回連載中の宮司の拙稿より

※過去の景観を知る方はもはや少ない。